

「花月日記」に見る松平定信の人間関係と文化活動

| | |
|-----|---------------------------------------------------------------------------------|
| 著者 | 岩橋 清美 |
| 出版者 | 法政大学多摩論集編集委員会 |
| 雑誌名 | 法政大学多摩論集 |
| 巻 | 37 |
| ページ | 207-220 |
| 発行年 | 2021-03 |
| URL | http://doi.org/10.15002/00024048 |

「花月日記」に見る松平定信の人間関係と文化活動

岩 橋 清 美

はじめに

「花月日記」は、白河藩主松平定信が、嗣子定永への家督相続が認められて隠居生活に入った文化九年（一八一二）四月六日から、死去の前年にあたる文政十一年（一八二八）まで書きつづった日記である。本稿は、この「花月日記」のうち文化年間を分析対象として定信の文化活動の一端を明らかにするものである。

松平定信については、寛政改革を主導した老中であることから、政治史・外交史・経済史・地域史などにおいて研究が進められ多くの成果がある⁽¹⁾。彼の文人としての側面は主として博物館学・美術史・文学の分野で研究が進められてきた。とくに一八五九点の古物が収録された『集古十種』に関する研究が多く、出版過程については佐藤洋一氏によって明らかにされている⁽²⁾。編纂過程を明らかにした研究には川見典久氏の成果があり、ここでは、『集古十種』兵器篇に掲載された武具類の画像と『武器図説』のそれとを比較することで、十八世紀半ばに伊勢貞春周辺で収集された資料を基にして、補足調査を行ってまとめられたことを明らかにした⁽³⁾。また、この点に関わって『集古十種』の調査が、家臣の派遣だけではなく、定信自身が古物を取り寄せたりして政務の合間に調査を行っていたことも判明した⁽⁴⁾。こうした博物館学からのアプローチによって書誌学的分析が進んだが、定信の古物選定基準や古物に対してどのような意識を持っていたのかについては明確に論じられてこなかった。この点について筆者は兵器篇を分析対

象として、源義家・源頼朝・源義経・楠正成にまつわる由緒を持つ古物が多いことを指摘し、その背景には定信が志向した「大政委任論」との関わりがあることを論じた。さらに、少数ではあるが、武家に伝来するものだけではなく、百姓や町人が所蔵する古物も取り上げたところに定信の君臣共楽の志向性が看取できるとした⁽⁵⁾。

一方、文学の分野では、二〇〇六年に『文学』の誌上で「松平定信の文学圏」という特集が組まれ、和歌を中心にその特質が多角的に論じられた。このなかで岡嶋偉久子氏は「花月日記」の歌の料を分析し、「花月日記」が後世の子孫に伝えるべく周到に準備され、推敲・浄書を重ねてなった作品であり、家族をはじめとする近しい人々との関りの記録であると述べた⁽⁶⁾。藤田真一氏は隠居後に浴恩園で和歌を詠む定信と老中としての定信は別物ではなく、完全に一続きの存在であることを、彼の和歌を通して実証した⁽⁷⁾。この両者の論点は、「花月日記」を理解する上で重要な指摘である。それは、本日記が定信の私的な日常生活を綴ったものでありながら、社会や文化に対する定信の思想が端々に見られるからである。

本稿では、こうした研究成果に学びながら、「花月日記」の特質を紹介し、定信にとって、政治と文化が一体的なものであったこと述べる。

本論の前提として、「花月日記」について概観しておきたい。「花月日記」は天理大学付属天理図書館に所蔵されている。定信は生涯のうち、「花月日記」だけではなく多様な日記を残した。「花月日記」は定信の日記中で質量ともに最も豊富であり、完成度によって草稿本・浄書本・その後の書写本である上写本の三つに分類でき、さらに初めの手控えメモとして懷中本「楽亭日記」があるとされている。「花月日記」の最終清書本は上写本である⁽⁸⁾。定信の諸日記および「花月日記」についてはすでに岡嶋氏による分析があるので、これに従って簡単に述べておきたい⁽⁹⁾。現在、上写本が文化十四年（一八一七）から文政五年（一八二二）まで十冊、浄書本が文化九年（一八一二）から文政十二年（一八二九）まで三四冊伝来しており、いずれも定信自筆本である。上写本は綴葉装仮綴で概ね縦十九・八センチメートル、横十九・〇センチメートルで各冊とも表紙から全丁通しで綴穴がある。

浄書本は綴葉装で、大きさは縦一七・三センチメートルから一八・四センチメートル、横一六・三センチメートルから一八・三センチメートルである。全冊に文様を異にする裂表紙がかかっている。本日記の別冊に近江堅田藩主で若年寄を勤めた堀田正敦の序文がある。天理大学付属天理図書館では、『ビブリア』に文化十一年（一八一四）以降の「花月日記」の翻刻文を順次掲載している。本稿も特別に断らない限りこれを利用した⁽¹⁰⁾。なお、『ビブリア』誌上に掲載されている翻刻文は上写本を底本とし、欠本している年代については浄書本を用いている。

1 家族と家意識

「花月日記」は、致仕後の浴恩園の暮らしぶりを記した日記であるが、一見すると日々の詠草が中心であるように見える。しかし、詳細に見ていくと、その内容は大きくわけて、日々の天候や庭園の花の開花、自身や家族の動静と健康状況、浴恩園を訪ねてきた武家・文人、市井の情報といった事柄に分類されよう。ここでは、まず、家族に関する記述を紹介したい⁽¹¹⁾。家族・親類として「花月日記」に頻繁に登場する人物には、定信の後室伊予大須藩主加藤泰武の女子隼（北の方）、隼との間に生まれた百合子（伊予大須藩加藤泰濟室）・定永（定信の嗣子、白河藩主）・烈子（後に高島藩主諏訪忠恕室になる）、側室中村氏との間に生まれた寿子（越後村上藩主内藤信敦室）・定栄（後に松代藩主真田幸専の養子となり幸貫と改名する）・たき子（高島藩主松平輝和嫡男輝健室、輝健の死後は浴恩園で生活した）・秦子（平戸藩主松浦熙室）がいる。定信の孫たちも登場するが、嫡孫永太郎（母親は定永の妻、徳島藩主蜂須賀治昭の女子綱子）のほか季三郎（定栄の子と推定。定信の嫡孫であったが、二歳で死亡）・永次郎（定永の側室の子か）・政子（定栄の子）がこれにあたる。その他の親族として、あま君（田安宗武の側室、定信の生母）・田安の君（田安家当主田安斎匡、將軍徳川家斉の弟）・真田のおば君（定信の養父定邦の妹定子、松代藩主真田幸弘室）・定子（ときはばしの北の方、田安宗武の八女、定信の同母妹、福井藩主松平治好室）・溜池のあね君（田安宗武の三女淑子、定

信の同母姉、佐賀藩主鍋島重茂室）が登場する。

では、史料をみていこう。

(1) 雅楽への関心

【史料1】文化十一年正月九日条⁽¹²⁾

あさより、いとどのどかに打かすみて、ふるとハミえぬ春雨の、何となふまごちしめるけしき也、けふハ、あそつな子：ようこも来り給ふ。(中略)庭をも、かさゝしてありき給ふ、それより酒くミあひぬ。翁ハかこをかき、あそハ箏ひき給ふ。つな子ハ笙ふき、定栄ハつゝミうち、萩風なんど、ひちりき笛などして、さまざまの曲をなし、あるハ詠曲うたひなどす

文化十一年(一一一四)正月九日条には、定永(あそ)・綱子・定栄らが集まり定信とともに音楽を奏でて過ごしたことが記されている。定信の生家田安家には雅楽・能楽などの楽書が多く所蔵されており、父田安宗武は雅楽研究に熱心で、幕府から多くの楽譜や楽書を借り受けていた。定信もその影響を受けて雅楽を学び、諸臣にも奨励していたという⁽¹³⁾。こうした定信の雅楽への関心は、政教の要として礼と楽とを重視したことにも通じる⁽¹⁴⁾。

天理大学付属天理図書館所蔵の松平定信関係史料には、「催馬楽譜」・「箏譜」・「謡物譜」・「神楽秘譜」などがあるが、なかでも「催馬楽譜」は多数、伝来している。

(2) 定永の溜詰昇格

文化十一年(一一一四)五月、定永は帝鑑詰から溜詰に昇格した。溜詰とは、將軍との関係から見れば臣下に与えられる最高の殿席であった。五月十四日の日記には、「あすの辰のときに、あそに、まうのぼり侍れと執政よりの奉書来りしとの事なり、なに、あすよりて、あすハもちなり、あしき事ハあらじ、などと思ふより、まづ涙ぞおつる」

〔¹⁵〕とあり、昇格を喜ぶ様子がうかがえる。定信は、定永の昇格について「かく年わかつて、かゝる事ハたへて聞も及ばねバ、おほくの人に打こたえる事なくしてハ、いかゞあらん、それにむくふるほどの進徳すぎやうなきときハ、かならずばちあたり侍るものぞかし」〔¹⁶〕と記し、定永が十五歳で従四位に叙され、二四歳で溜間詰に昇格したことはこれまでに先例がないことであるため、これに報いる勤めをなさなければならぬと説いている。その後、定信は溜間詰の心得を巻物にまとめ定永に渡した〔¹⁷〕。定永が若くして昇格したのは、定信の老中としての功績によるものという風評もあったが、定信の満足げな様子が日記から伝わってくる〔¹⁸〕。

定信は隠居の身とはいながらも、定永の動向を気に掛けており、文政十年（一八二七）四月、將軍徳川家斉の太政大臣叙任と徳川家慶の従一位叙任の御札として井伊直亮とともに上洛した際も、道中の様子を詳細に報告させている。悪天候のため川止めにあい、彦根藩に道を遮られたりしながらも、桑名藩が無事上洛を果たすと、その様子を「桑名よりは二千人近き人なるが、その人のしづかなる事、人々皆感じたり。旅宿酒のむものもなし。（中略）法令の厳なるを感ず」〔¹⁹〕と記している。川止め中に強引に渡河しようした彦根藩とは対照的に桑名藩が、静謐を保ち、京での評判を上げたことを誇らしく日記に記しているところに定信の家意識が看取できる。

このほか、家族や親族に関する記述には孫の永太郎の疱瘡の快癒があり〔²⁰〕、家族に対する細やかな気遣いが読みとれる。

2 社会情勢

「花月日記」には、全体に占める割合は少ないが、社会の情勢や政治向きに関する記録もみられる。その事例を紹介する。

(1) 越後における打ちこわし

【史料2】文化十一年六日二日条⁽²¹⁾

しら川より、とミのたよりとて、文書ら来りしとて、ミせに来る、ミレバこしの国、米いと高うなりしとて、何ものかさハぎたちてところぐに落文して、おほやけにハ何のうらミ奉るべき事ハなし、たゞ農民のゆたかなるものらが、米たくハへ置て、船もて大坂などへ出せばこそ高うなるぞかし、ことしのミのりかひなくバ、いかにして命をつながん、よてあすの廿四日、飯出のにて打より、いひむつびなん、一家より一人づゝ出あふべし、出さゞらん家をバ打こぼしつべし、などかいてければ、何しらぬもの、おほくあつまりて横行し、人出さゞる村へハ立入て狼藉す

この史料は越後で打ちこわしが発生したことを伝える記述である。越後では前年からの凶作で米価が高騰していたところに、富裕な百姓層が米を買い占め、船で大坂へ回送したため、さらに米価が上がり、困窮した百姓による打ちこわしが発生した。

この年は四月に村松藩で増税に対する一揆がおきており、五月三日には白河藩でも落文があり、翌日には打ちこわしが発生し、その様子は「自他のわかちなく、家などうちこぼしたり」⁽²²⁾という状況であった。これに対し、白河藩は、預地であった出雲崎陣屋から人員を繰り出して鎮圧し、十八人の百姓を捕らえたと「花月日記」にはあるが⁽²³⁾、実際のところは、五月二三日に蒲原・岩船両郡にまたがる白河藩預地と幕府領の錯綜地で米の安売りをもとめて百姓五〇〇〇名が蜂起し、白河藩はその鎮圧に向かい、二六日に退散させたのであった⁽²⁴⁾。このとき白河藩の役人は会津藩にも加勢を求め、一四〇名の百姓を捕縛するに至った⁽²⁵⁾。

定信はこの知らせを受け、「大筒に小石などおほく入れ」⁽²⁶⁾て打ちかけて追い払うべきと述べた上で、張本人を斬り殺して解決するわけではなく、「餓寒にせまり、つまにも、こにも、はなれつべきをも、しのび／＼居ても、あくこをなき故に、堪かねておこるべき」⁽²⁷⁾として、領主の仁政の必要性を説いている。そして、こうした騒動は藩主定

永にとつて「よき若人の手習」と考え、将来に備え対応策をとりまとめて「家の軍書」のなかに納めた⁽²⁸⁾。

(2) 感冒の流行と洪水

「花月日記」には感冒の流行や洪水といった疫病や自然災害に関わる記述も散見できる。

【史料3】文化十二年四月二十日条⁽²⁹⁾

この比、感冒おほし、かの衣をかへて感ずるものなりし、翁感得せる薬あり、解毒散とて痘毒をよく解す、五神錠とて食傷を解す、少減平胃散・辛郊散いづれも停食、又は酔をさまし、胃をすこやかにす、専ら病と飲とを和す、是らは人より伝得しにはあらず

文化十二年（一八一五）、江戸では感冒が流行していた。定信はこうした状況の影響からか、痘毒・食傷・停食・酔い覚ましといった症状を緩和する和漢薬を書き上げている。定信は、「花月日記」執筆当初から、自身の健康状態には細心の注意を払っており、頭痛や腹痛などの体調の不調をこまめに記録している。薬に関する知識も豊富であるが、「葉長くハ用ゆまじけりと、この比おほゆ」⁽³⁰⁾といった記述も見られ、薬に頼りすぎることを諫める一面もある。自然災害については以下のような記述がある。

【史料4】文化十二年七月十日条⁽³¹⁾

いづミ・河内、洪水なり、いせのあたりもおなじとぞ、この比、人のきたらねバ、外面の事いとうとし

【史料5】文化十二年七月廿日条⁽³²⁾

卯月の末の洪水ハ、ことにありけりぞ、大垣ハ、城もミナ水にひたりて、城下の寺のむねのかはら、三日斗、水より出てミえしとぞ。長嶋の城ハ大手の門のとびらも、いづこへか、おしながしてけりとぞ、人のうせにしハ、数へも尽すべうハあらずとぞ

【史料4】・【史料5】は文化十二年（一八一五）四月の大垣地域の洪水、同年七月の和泉・河内・伊勢の洪水を記

した部分である。「花月日記」には、中国・四国の洪水（文政九年六月十四日条）、阿部川の洪水（文政十年四月三十日条）、日光の地震（文政十年七月二十九日条）など災害の記述が多い。具体的な対応策は記されていないが、被害状況を把握しようとした様子が看取でき、致仕したとはいえ政治への関心の高さが窺われる。

文化末期は、異国船の来航も増えてきた時期であるが、「花月日記」には異国船情報はほとんど見られない。しかし、具体的な書名は不明ながら「西洋外国翻訳図書」を密かに借り入れ、部分的に書き写していることから（文政九年五月三日条）、海外情報収集に積極的だったと言えよう。定信は当該期に「函底秘説」を著し、外国船来航と百姓一揆への対応策を説いており、この点からも内憂外患に対する危機感を持ち、為政者としての対応を考えていたことがわかる³³。また、藩政においても自身の隠居後、風紀が乱れていることを憂い、藩中の奢侈を厳しく統制することを主張したが、実際には聞き入れられなかったようである³⁴。「花月日記」に記した市井の情報は、致死後も彼が為政者としての意識を持ち続けていたことを示している。

3 文化活動

最後に、「花月日記」の中心的な記述である人々の来訪と文化活動を取り上げる。「花月日記」は浴恩園の来訪者の記録といっても過言ではない。とくに文化十一年（一八一四）・同十二年（一八一五）頃は、家族・親戚・諸大名・文人の来訪が多い。その記述は「けふハ真田うし来る。あそにもあハまほしとの事にて、きたり給ふ」（文化十二年七月二六日条）³⁵、「すはうしハ、つりにのミ来り給へり」（同日条）³⁶などといった簡潔な記述が多いため、来訪者の間でどのような話をしたかは明確にしない。しかしながら、浴恩園の季節毎に咲く花々や釣りなどを口実に集まっていたようである。

浴恩園に集う諸大名には、越後藩主牧野忠精（長岡の君、定信の娘寿子の養父）・高崎藩主松平輝延（高崎の君、

定信の娘たき子の養父）、丹波亀山藩主松平信志（亀山の君）・宮川藩主堀田正毅（宮川の君）・徳島藩主蜂須賀治昭・伊予大洲藩主加藤泰済（大洲の君、綱子の父）・越後村上藩主内藤信敦（村上の君、寿子の夫）・松代藩主真田幸弘（このときは隠居）・松山藩主久松定通（松山の君）・近江堅田藩主堀田正敦（堅田の君、水月の君、月の君）、肥前平戸藩主松浦静山（このときは隠居）などがある。このほか、林述斎（幕府儒者）・屋代弘賢（幕府右筆）・広瀬典（白河藩儒者）・北村季文（幕府和歌方）・谷文晁（絵師）・狩野栄川院（幕府御用絵師）が登場する³⁷。

ここでは、古書の写本と和歌を中心にみていく。

（１）古書の写本

文化十一年（一八一四）から文化十三年（一八一五）の「花月日記」を見ると、この時期の定信は、「六歌集」（文化十一年二月六日条、同年十一月一日条）、「源氏物語」（文化十二年三月九日条）、「万葉集」（文化十二年六月十五日条・同年六月二十六日条）、「八代集」（文化十三年十月二十日条）、「風雅集」（文化十三年四月二二日条）、「伊勢物語」（文化十三年四月二十五日条）の写本を行っていた。

「万葉集」の書写について、定信は「けふ、ひるつかた、万葉集をうつしおへぬ、事なき日ハ、一日に一冊と半斗ハうつしぬ、事おほき日ハ聊も、これに及ばざりしハ少なからず、されど日数、四十日ニハ及ばざりけり」³⁸とあり、一日一冊半のペースで精力的に取り組んでいた様子がうかがえる。

（２）和歌

定信は日々、庭を散策しながら和歌を詠みそれを日記に書き付けていた。彼の和歌の指導は江戸幕府和歌方で国学者でもある北村季文であった。季文は北村季春の子で、諸大名から庶民に至るまで多くの門人を抱え、浴恩園に集う大名にも門人がいた。定信は彼から頻繁に御題を与えられて歌を詠み添削を受けていた。御題は絵画に寄せたものや

季節の花などであった。また、定信は諸大名から和歌の添削を依頼されることもあり、文化十二年（一八一五）八月には堀田正敦の和歌を添削した³⁹。

「源氏物語」を歌題にすることもあり、文化十二年（一八一五）六月十一日から十四日にかけて「源氏物語」五四帖の外題に即して歌を詠んでいる。

洛恩園では、諸大名や文人たちが集まり書画会のような会が開かれていた。一例を示しておく。

【史料6】文化十三年四月十一日条⁴⁰

季文・文晁のたぐひ来たる、（中略）春風館の軒のつまに藤の左ミぎに、さきかゝりたれば、そのかたの戸おしあけ、せんしきて、あるは歌よミ、画などかきて興じぬ

文化十三年（一八一六）四月十一日、洛恩園内の春風館で花見を兼ねた書画会が催され、文晁が描く絵に季文らが和歌を添えていった。文晁は「竹」・「深ミ草の白き花」・「おそぎくらに郭公」・「暮山の月と鳥」をテーマに次々に描いた。この日、姓名不詳ではあるが、田安家の家来で「草木の名にくハしく、かつ西洋の学をなすもの」（本草学者・蘭学者）がやってきて文晁に藤の花を絵を乞うた。文晁は乞われるままに絵を描くと、今度はその者に和歌を求めた。すると、その者は「とはるゝをかけて思へば紫のゆかりぞ深きやどの藤がえ」と詠んだ。ここで注目されるのは花見にちなんだ書画会が、まさに定信が求めていた「君臣共楽」の場になっていたことであり、そこに集う様々な人々が定信に新たな知識や情報をもたらしていたのである。

おわりに

以上、雑駁であるが、文化期の「花月日記」の一部を取り上げ記述の特徴について考察した。「花月日記」の内容は、①家族や親族の状況、②文化活動、③市井の情勢に大別できる。①では家族との管弦の会を取り上げ、定信の生家で

ある田安家の学芸の継承を指摘した。そして藩主定永の殿席昇格に喜びつつも、藩主としての心得書を認めるなど、隠居後も藩政に関与していた様子が看取できる。

②では、浴恩園という場を介した歌会や書画会が、君臣共楽の場として行われていたことを紹介した。文人たちを受け入れることは、単なる趣味に止まらず、新しい知識や情報を交換する場になっていたことが窺われる。「花月日記」は致死後の定信の記録とは言え、当該期の社会状況に対して、為政者のあり方を問う部分も少なくなく、彼にとって政治と文化が不可分の関係であることを示している。浴恩園の訪問者、文化活動の諸相をデータ化し、定信をめぐる文化ネットワークを具体化することを今後の課題としたい。

【注】

- (1) 伝記としては、洪沢栄一『楽翁公伝』（第二刷）（岩波書店、一九八三年）、藤田覚『松平定信』（中央公論社、一九八三年）、高澤憲治①『松平定信』（吉川弘文館、二〇一二年）がある。寛政改革を論じた研究は膨大であるため以下に主要な成果をあげておく。政治史には、藤田覚『近世政治史と天皇』（吉川弘文館、一九九九年）、白井哲哉『日本近世地誌編纂史研究』（思文閣、二〇〇四年）、藤田覚『近世政治史と対外関係』（東京大学出版会、二〇〇五年）、高澤憲治②『松平定信政権と寛政改革』（清文堂出版、二〇〇八年）、都市史・経済史には吉田伸之『近世巨大都市の社会構造』（東京大学出版会、一九九一年）、安藤優一郎『寛政改革の都市政策』（校倉書房、二〇〇〇年）、竹内誠『寛政改革の研究』（吉川弘文館、二〇〇九年）、農村行政については柏村哲博『寛政改革と代官行政』（国書刊行会、一九八五年）、西沢淳男『幕領陣屋と代官支配』（岩田書院、一九九八年）などある。
- (2) 佐藤洋一『集古十種』及び『集古十種』の刊行過程について（『神道古典研究所紀要』第八号、二〇〇二年）、同『集古十種』版本の刊行過程（『福島県立博物館紀要』第二三号、二〇〇九年）。

- (3) 川見典久『集古十種』兵器篇と十八世紀の武器調査（『古代文化研究 黒川古文化研究所紀要』第十六号、

二〇一七年）、同『集古十種稿』分析に見る『集古十種』完成までの過程」（『古文化研究 黒川古文化研究所 紀要』第十七号、二〇一八年）。

（4）小林めぐみ『『集古十種』の編纂―その目的と情報収集―』（『あるく・うつす・あつめる―松平定信の古文化財調査―』福島県立博物館、一九九二年）。

（5）拙稿『集古十種』にみる松平定信の古物認識」（『書物・出版と社会変容』第二四号、二〇二〇年）。定信の君臣共楽の実現については、タイモン・スクリーチ『定信御見通し―寛政視覚改革の地政学―』（青土社、二〇〇三年）七五頁、今橋理子『政治と文人のはざまに―松平定信の大名文化―』（『あるく・うつす・あつめる―松平定信の古文化財調査―』福島県立博物館、一九九二年）、同『江戸絵画と文学―〈描写〉と〈ことば〉の江戸文化史―』（東京大学出版会、一九九九年）を参照。このほか定信の学芸全般を概観したものに、磯崎康彦『松平定信の生涯と芸術』（ゆまに書房、二〇〇二年）がある。

（6）岡寫偉久子『『花月日記』―雅文と歌の中に見るもの―』（『文学』第七卷第一号、岩波書店、二〇〇六年）。

（7）藤田真一『治者の文雅―白河侯と花月老人―』（『文学』第七卷第一号、岩波書店、二〇〇六年）。

（8）岡寫偉久子他『翻刻『花月日記』松平定信自筆』（一）文化十一年一月―四月』（『ビブリア』第一一一号、一九九九年）以下、『ビブリア』からの「花月日記」引用は、引用記述の年月日と『ビブリア』の号数・頁数のみ記述する。

（9）註（8）岡寫論文と岡寫偉久子「松平定信『日記』攷―『花月日記』を中心に―」（『ビブリア』第二一〇号、一九九八年）。

（10）文化九年（一八一二）の浄書本は『天理図書館善本叢書 和書之部』第七九卷二 花月日記（八木書店、一九八五年）に、文化九年（一八一二）四月から同十年十二月までの日記は岡寫偉久子他校訂『史料纂集 花月日記』第一（八木書店、二〇二〇年）に収録されている。なお、「花月日記」の上写本・浄書本（請求番号

〇八一イ五三)には一部閲覧できない日記が含まれている。

- (11) 「花月日記」に登場する定信の親族については、『天理図書館善本叢書 和書之部』第七九卷二 花月日記(八本書店、一九八五年)の解題に詳しい。

- (12) 『ビブリア』第一一二号(一九九九年) 九八頁。

- (13) 岸辺成確他「田安德川家蔵楽譜目録」(『東洋音楽研究』第四一・四二合併号、一九七七年)。福井久蔵『諸大名の学芸と文芸の研究』(厚生閣、一九三七年)。

- (14) 洪沢栄一『楽翁公伝』(岩波書店、一九三七年) 三九七頁。

- (15) 〃(18) 『ビブリア』第一一二号、七〇〃七二頁。高沢①著書二四〇頁。

- (19) 文政十年五月十八日条(『ビブリア』第一五一号、二〇一九年) 一三二頁。

- (20) 文化十一年三月二八日条、註(12) 一一九頁。

- (21) 〃(23) 註(15) 七四〃七五頁。

- (24) 〃(25) 註(1) 高澤①著書、二四〇〃二四一頁。

- (26) 〃(28) 註(15) 七四〃七五頁。

- (29) 〃(30) 『ビブリア』第一一五号(二〇〇一年) 五九頁。

- (31) 『ビブリア』第一一六号(二〇〇二年) 五三頁。

- (32) 註(31) 五五頁。

- (33) 〃(34) 註(1) 高澤①著書、二四二〃二四三頁。

- (35) 〃(36) 註(31) 五六頁。

- (37) 浴恩園の訪問者については註(11) 参照。

- (38) 文化十三年六月二十日条(註31) 五五頁。

(39) 註(31) 六五頁。

(40) 『ビブリア』一一九号(二〇〇三年)四〇～四二頁。

本稿は、二〇一七～二〇二〇年度科学研究費基盤研究(c)「江戸考証家の古物収集に見る歴史意識とネットワークに関する研究」(研究番号五〇七四九六五三)の成果の一部である。